
木漏れ日の中で・第 1 章

館波実笠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木漏れ日の中で・第1章

【Nコード】

N8804A

【作者名】

館波実笠

【あらすじ】

ある夏休み…俺はある人と出会う。そいつは、なんだかわけのわからないことを言うやつで……それでいて泣き虫で。だから、俺が助けなきゃいけないと思ったんだ……ある出会いから始まる、ストレンジストーリー。

第1話（前書き）

新連載の第1章、その第1話とややこしくなっています。長い目で見てください。

第1話

「あつついなあ…」

この上ないと言えるほど暑い日が続いている。

ここ一週間ほどで気温は過去最高を記録したのではないのか、というほどで、太陽は容赦なく照りつけている。

このままでは人間が照り焼きになるのも時間の問題かもしれない、と本気で考えてしまう。

夏本番にはまだ少し早いぐらいのこの時期に暑さはピーク目前、セミは盛大に鳴いている。

そんなクソ暑い中、すみや・たくみ角谷拓深は芝生の上に大の字に寝ていた。もちろん直射日光の当たらない木陰でだ。

木の葉が何重にもかさなった間から漏れる光にときおり目を細める。

期末試験も終わり、終業式前の試験休みだというのに彼は学校の芝の上で寝そべっているのだ。

「つたく、葛西のやついつまで待たせるつもりだよ…」

拓深は一人、つぶやく。

彼がここにいる理由、それは同級生である葛西かさいが校内に忘れ物をしたとかで、偶然にもコンビニに行こうとしていた拓深がつかまり、連れて来られてしまったのだった。

まったく、今日は不運この上ない日に違いない、と拓深は思う。

葛西が行ってから早十五分が過ぎようとしている。

木陰に横になっていても額にしっとりと汗が出始めるのがわかる。じ〜わじ〜わじ〜わ…

あげくの果てに頭の上…ちょうどそこには桜の木がある…でセミが鳴き始めた。

「サイアク…」

舌打ちをすると、寝転がっていた体勢から起き上がる。

セミが頭の上には落ちて寝られもしない。

拓深がいるのは校内でも高い位置にある場所だ。そもそも彼の通う学園は国内でも一、二を争うほど広大な敷地を持っているのだ。

高台となっているこの場所は拓深のお気に入りスポットである。

昼休みにはよくここに来てパンを食べたりした。

「しかし……遅いな」

さすがにしびれを切らした拓深はそろそろこちらから乗り込んでやろうかと足を進めた。

その瞬間……

第2話

「きゃあっ!!」

小さな悲鳴とともに、突風が拓深の前を通過する。それに乗って白い紙吹雪が鼻先をかすめた。

「？」

なにかと思い、声のした方を見ると、この学園の制服を着た少女が立っていた。

有名デザイナーが作ったその制服を見間違っわけもない。

彼女の手には何枚かのB5ほどのプリントがあった。

どうやら舞った紙吹雪の正体らしい。

拓深は舞っているプリントを器用に指の間に挟み込むようにしてキャッチする。

「ん？」

よく見るとそれはプリントではなかった。両面とも白紙であったし、この手触り…

「スケッチブックかなにか？」

その手触りに拓深は覚えがあった。紙は足元にも落ちていた。こちらも拾ってみると、そこには緑と青が折り重なるように描かれ、この高台が表現されている。

「へえ…うまいもんだ」

拓深の口から素直な感想が漏れた。

それは彼だけがそう思うわけでもないだろう。おそらく見た者の誰もが答える感想だ。

それほどに彼女の描いたであろう絵は美しかった。

「あ、あのっ…」

拓深が絵に見入っていると、突然声かけられる。いつの間にか少女が彼の横まで来ていた。

「あ、ああ。ごめん。はい、これ」

そう言い、手にあつた紙を渡す。

少女は少し恥ずかしそうに顔をうつむかせて受け取った。

まあ、誰しも自分の描いた絵を他人に勝手に見られてはこうなるだろう、と拓深は思った。

「あ、ありがとうございます」

少女はぺこりと頭を下げると、足早に立ち去った。まるで吹きすぎた突風のような印象しか残っていない。

「び、美術部とかか？夏休みにまでご苦労なこつて」

少々啞然としながらも、ふと拓深は視線を高台にあるベンチに向ける。するとそこに一冊の本が置かれていることに気付く。

近付いて手に取ると、それはスケッチブックだった。

「さっきの子か？」

第3話

名前がないか裏返してみると、そこには整った字体で、美原鈴華みはらすずかと書かれていた。

横には申し訳程度に一年A組と添えられるようにして書いてある。一のAといえは拓深と同じクラスのはずだが……美原などという生徒はいただろうか？拓深は首を傾げ、自らのクラスのメンバーを思い出そうとするが、やはり美原はいない。拓深自身、記憶力がない方ではないし、むしろいい方である。だいたいこの学園の同学年には中学から同じという者が多く、覚えるのにはそれほど苦労しない。

そして、美原もわりと印象に残りやすい少女だった。色白で長い黒髪……どこか小説に出てきそうな、そんな少女だった。

「…あ、てか、これ届けないといけないよなあ…」

多少面倒に思えたが、やはり拾った以上は無視できない。そもそも角谷拓深とはそういう性格なのだ。

小学校からの友人である葛西に言わせれば「自ら面倒に突き進む自爆バカ」ということなのだ。

まあ、このままにしても後味悪いだけなので、拓深は少女の後を追った。

高台を下りたところで、ふと葛西のことを思い出す。

「まあ、いいよな」

興味なし、とでも言うような口調で拓深はつぶやくと、駆け出した。

だが、問題がある。

すでに少女の姿を見失ってしまっているのだ。

「ちつ…とりあえずはあれか、美術室か？」

美術室は本校舎とは別の建物にある。他にも別館的な建物はいくつもあり、さすが学宮学園といったところだ。そもそもこの学園は

広すぎであり、高台から美術棟まで歩いて軽く5分はかかる。
追いつけるとは思ったがな…
拓深は走った。

第4話

「……………」
悪態をつきたい気持ちを必死に押さえながら、鈴華は校舎裏を歩いていた。心なしか普段よりも歩調が早く、足音が大きい。

「なんだってこんなことに……………」

下唇を強く噛み、近くにあったベンチに腰かけた。ともかく頭の中を整理しなければならない。

片手に持っていた二冊のスケッチブックを傍らに置き、一冊をばらばらとめくる。

そこにあるのは自分が描いた絵であり、そうでないとも言える絵。矛盾する言葉。

まるで今の自分を表すかのような…虚構の世界に迷い込んだような存在。

鏡の国のアリスでもここまで不可思議なことは起きないだろう。黒髪をぐしゃぐしゃとかく。それが何の意味もないとわかっていくのに、そうしてしまう。これが自らの行動なのか、『鈴華』としての行動なのか。それはわからない。

理解したくもない。理解すれば自分の存在がわからなくなってしまっから。

うやむやに、まるでコーヒーに溶かした砂糖やミルクのように。この世界に馴染め合ってしまう。

鈴華は小さくため息をつき、ベンチに座り直した。
と。

「きゃあっ!!」

突然吹いた風が彼女の髪をかき乱し、手に持っていたスケッチブックを吹き飛ばした。

しまった…そう思った瞬間にはスケッチブックはばらばらになり、あちこちに舞っていた。

その一枚を目で追って行くと…

「な…」

彼女の口から驚愕に彩られた言葉が漏れる。

一枚の紙片は宙を泳ぐかのように流れ、一人の少年の手に収まった。

適当に切ったような黒髪の下で、切れ長の目が紙片に向けられている。

第5話

あいつは…

忘れもしないその顔。

内から沸き起こる感情で頬が紅潮していくのがわかる。

「あ、あのっ……」

声が上がらず、うまく言葉が出ない。思わず出た言葉も意とは反したものの。

わかってはいるのだが、言葉の出ないもどかしさが次々と湧きあがる感情を空回りさせる。

少年がこちらに気づいたようで、視線が絡み合う。

「ああ、ごめん。これ」

そう言い、スケッチブックの一枚を渡そうと彼が手を伸ばす。どこか記憶の奥底にあるものと同じ……いや、似たような仕草。

鈴華は、はつとして受け取ると、今度は足が勝手に彼から遠ざかるうとする。

違う……これではいけない。

そっちではない…そう考えても、足は勝手に彼から逃げるように駆け出した。少年が後ろで何か言っているようだったが、足は止まらない。

高台を駆け下り、一番近い校舎に入った。

一番近いと言ってもしばらく走ったためか息が上がってしまっている。

入り口の壁に身を預ける。ひんやりとした感触が背を伝った。

「ぜえ…はあ」

肩で息をし、なんとか呼吸を整えると、改めて彼の顔が脳裏に浮かぶ。忘れ得ぬ、あの顔。

…ともかく、また探さなければならぬだろう。

「厄介だな……これでは……」

無意識に親指の爪を噛んだ。
かり……り……

「……いや、そうでもないか」

ふとある考えが頭に浮かんだ。
これ以上ないというふうな妙案が。

「まあ……とにかく情報が必要だろうな……」

そうぼやくようにして、鈴華は窓の外を眺めた。
青葉が茂り、射す日差しが目には痛いほどだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8804a/>

木漏れ日の中で・第1章

2011年1月8日15時32分発行